

# 想像力豊かな読みが育つ学習指導の工夫

－ 低学年の文学教材を通して －

浦添市立当山小学校教諭

金城 淑子

## 目 次

I	テーマ設定の理由	1
II	研究テーマについての基本的な考え方	1
1	「想像力豊かな読み」について	1
2	イメージ化について	2
3	低学年の文学教材の指導	2
4	語い・語句の指導	2
III	研究の内容と方法	3
1	実態調査	3
2	調査の結果と課題	3
IV	研究の仮説	3
V	作業仮説の検証の手だて	4
1	「仮説1」の検証の手だて	4
2	「仮説2」の検証の手だて	4
3	「仮説3」の検証の手だて	5
VI	仮説検証のための指導計画	5
1	単元名	5
2	単元目標・指導事項	5
3	単元について	5
4	教材名	5
5	教材について	5
6	学習指導計画	6
7	授業の展開と結果と考察	7
VII	研究の成果と考察	18
1	「仮説1」の結果と考察	18
2	「仮説2」の結果と考察	18
3	「仮説3」の結果と考察	22
VIII	今後の課題	22
	おわりに	
	主な引用文献・参考文献	

# 想像力豊かな読みが育つ学習指導の工夫

## — 低学年の文学教材を通して —

### 【要約】

この研究は、想像力豊かな読みを育てるために、低学年の文学教材を通して学習指導の工夫を目指したものである。

「読み」の調査から児童の読み、書き、言葉、想像力及び国語に関する意識の実態を把握し、指導の課題を見つけ、二年生の文学教材「アレクサンダとぜんまいねずみ」の学習活動を通して個人及び学級全体の読みの変容を促す計画を立てた。

その結果、基本的な読みである音読や書く活動を取り入れ、叙述に即した読みをさせ、相互交流の場を持たせる等の手だてをすることで、想像力豊かな読みの育ちが確認できた。

**キーワード** □ 低学年の文学教材 □ 叙述に即した読み □ 想像力 □ 豊かな読み

### I テーマ設定の理由

国語科では、言語の教育を重視し、主体的に対応できる、適切な表現力と正確な理解力を育て、言葉を通して思考力や想像力及び言語感覚を育てることを基本としている。

言葉を通して考え、想像し、表現していくことは、すべての学習の基礎である。特に、低学年においては、国語科は学習指導の基礎であり、国語の力を確実に身に付けさせてやるのが大切である。

このような基本を考慮しながら、低学年の文学教材の指導を考えていきたい。

文学教材のねらいは、読む過程で、子供一人一人が豊かな文学体験をし、その中で豊かな感性や心を育てることである。作品の内容を知的に理解するだけでなく、感動することである。そこでは、表現に即して豊かにイメージを描き、味わい、想像豊かな読みが展開される。

ところが、毎日の授業を振り返ると、子供の実態は、部分読みや言葉のみの反応であったり、イメージを描く学習が十分であったとはいえない。そのため、学習後の変容も少なく、豊かに読みとらせる指導の工夫が足りなかったと考えられる。

そこで、想像力豊かな読みの指導は、まず、子供の興味・関心・意欲を大事にし、「読み、書き、話す、聞く」という言語活動が、一体化できるように工夫する事が大切である。それには、①一人一人の読み(音読)の実態について把握する。②イメージ化

を意図的・計画的に持たせる。③書くことと具体化させる。④話し合いの中で、内容を広く深く捉えさせる。このような手だてを工夫することにより想像力豊かな読みが育つと考えた。

### II 研究テーマについての基本的な考え方

#### 1 「想像力豊かな読み」について

学習指導要領、理解の「想像しながら読む」の低学年の指導事項は、次のように記述されている。

1年 オ 場面の様子を想像しながら読むこと。  
2年 カ 人物の気持ちや場面の様子を想像しながら読むこと。

1年 エ 文章の内容の大体を読み取ること。  
2年 オ 文章の叙述に即して内容を正しく読み取ろうとすること。

文章の内容を正しく読み取るために、叙述に即して読むことは、基本的事項の一つである。

また、文章を正確に読むと同時に、文章表現から想像力を働かせて自由にイメージを描いて読むことは、文学教材を読む大切な能力の一つである。

これを受けて、研究テーマの基本的な考え方を述べたい。

文学の読みの楽しさは、想像を広げる楽しさでもある。人は文学を読む場合、作品の中の描写や叙述を手がかりに、人物の気持ちや情景を具体的に思い描き、その世界を楽しむ。つまりイメージ化しながら読むのである。このイメージ化する働きが想像力である。文学の読みに於いてイメージ化が特に必要となるのは描写の文章においてである。人物の様子や心理・情景、できごとの様子など描写の文章から思い描いていくのである。描写のことばをできるだけ具象化して動作化したり、イメージ化したことを書いたり、音声化したりしながら、人物・情景・できごとをはっきりと心に描き出していくことが読みの楽しさにつながる。

文学を味わうことは、想像力によって次々に新しい世界を心の中に作り出していくので、表現活動とも創造活動ともいえる。

以上をまとめると、想像力豊かな読みとは、作品の中の言葉を手がかりにして主人公の気持ちや性格を想像することであり、また、場面の様子や移り変わりを想像することである。それが、作品の主題につながる読みとなる。

## 2 イメージ化について

イメージ化の読みの学習において大切なことは、想像力を働かせることである。想像力の働きが盛んになるとイメージの働きも盛んになり、豊かで確かなイメージ化の読みができる。

有定稔雄は、イメージ化の読みの力を育てるためには、その前提条件として、「感受性」「自由性」「流動性」について配慮することが大切であるとしている。

第一は感受性である。虹を見てはきれいだと感じ、花を見ては美しいと思ひ、雨にあえばこれもいいなと思う。美しいものやよいものに対し、敏感に、美しさやよさを感じ取ったりする子どもを育てること。これが感受性の育成である。明るく豊かなイメージは、こうした鋭敏な感覚の持ち主である子どもによってえがき出すことができる。

第二は、自由性である。子どもはできるだけ自由な雰囲気の中で育てることが望ましい。のびのびと、おおらかで、自由な世界の中で、心身共に

健やかな子どもを育てる。そうすることによって、子供の夢は無限に広がり、豊かな創造力が育ってくる。

第三は流動性である。流動性というのは、子どもの心を流動的に動かし、変化と創造に富む働きをさせる。子どもの思考や表現の視点・観点を交えさせて、新しい角度からものを見、ものを考えるように仕向けることが大切である。これが新鮮なイメージを生み出す契機となる。

## 3 低学年の文学教材の指導

低学年では、話の順序に沿って、事柄を理解しながら話しを聞いたり文章を読んだりすることが大切である。また、理解力を養うための基礎的態度や習慣、読む活動に対する意欲を養う時期なので十分留意する必要がある。

2年生の理解(物語文を読む)の指導で、次のことを工夫することが重要である。

- ・文節をつなぎ、なめらかに読むことができる。
- ・想像をふくらませ、簡単な書く活動ができる。
- ・話し手を見て、最後まで聞くことができる。
- ・話の情景を思い浮かべながら聞き、あらすじをつかみ表現することができる。
- ・25字/分のスピードで視写できる。
- ・声の大きさや速さを考えて、聞き手にわかるように話すことができる。

## 4 語い・語句の指導

言葉に着目した読みの指導は、思考力や想像力を育てる有効な方法である。それを身につけるためには、豊かな語いを育てることが大切である。

語いとは、あるまとまりをもった語の群れ・集合である。例えば、母親を表す語の集合として、母・かあちゃん・おふくろ・おかあさんなどがある。つまり語いは、関連ある語句の集合としてとらえる。語い指導では、ことばを通して子どものものの見方、考え方、感じ方を確かなものにし、深めていくことをねらいとしている。

子どもは、文中にある語いからイメージをとら

える時、子ども一人一人の経験や想像から多種多様なイメージがわいてくる。また物語を読んでいく時も、言葉から呼び起こされるイメージで、主人公に同化したり、登場人物につきつぎに感じたりすることができる。言葉は、イメージによって理解され、イメージは、言葉によって育てられる。また、言葉に感じる心も育てられる。

豊かな読みをめざす語いの指導の中で、読み取りに大切な語句（キーワード）がある。甲斐睦朗によれば、作品の表現内容の語句として、①文学教材の内容展開にかかわる語句 ②作品の主題にかかわる語句 ③人物の人間像（の変容）にかかわる語句 ④情景描写にかかわる語句 ⑤文体・語感にかかわる語句に分けられる。

語い・語句の指導として、優しい言葉は、優しい表情、優しいしぐさと結びつけて身につけるとよい。体と結びつけてやると効果的である。

また、音読によっても、語い・語句を効果的に身につけることができる。音声化された語いは、文脈の中で意味や使われ方が理解され、生きたことばとして捉えられていく。そこには、ことばの抑揚、リズム、ひびき、調子があり、いろいろな感情が込められている。

その他に、実物や絵や写真、言い替え、動作化、短文作りで理解させる。また、類推し、比較して考える等がある。

### Ⅲ 研究の内容と方法

#### 1 実態調査

(1) 調査実施日（授業前 1996年12月24日）

(2) 調査対象

浦添市立T小学校 2年D組 38人

(3) 調査の内容と方法

① 子供の「読み・書き・言葉・想像力」の実態を下記の観点で調査する。

- ・国語学習における興味・関心。
- ・読みは、道徳の本を1分間読む文字数。
- ・書きは、教材文を1分間視写できる文字数。
- ・言葉の意味理解は、漢字にルビをうたせ、言葉の短文作りをさせる。

- ・物語を読んでいる時、読んだ後の気持ちや想像の項目を複数選択して想像力を調べる。
- ・イメージ・マップで調査する。

#### ② 国語の意識調査

本を読む。字を書く。お話を聞く。発表する。この結果を仮説設定に生かし、学習終了時の変容について調査する。

### 2 調査の結果と課題

#### (1) 結果

- ① すらすら読めない子がいる。
- ② 書くのに時間がかかる。
- ③ 言葉の意味理解が弱い。
- ④ イメージ化に時間がかかる。
- ⑤ 発表をしたがらない。
- ⑥ 最後まで話を聞くことに抵抗がある。

#### (2) 課題

- ① すらすら読めるように支援したい。
- ② 書く時間を確保したい。
- ③ 言葉の意味理解を捉えさせたい。
- ④ イメージ化の方法を援助したい。
- ⑤ 発表の仕方や場の工夫、機会を多く持たせたい。
- ⑥ 話し合いのあり方を分からせたい。

（聞く態度）

これらの課題を仮説へとつなぐ。

### Ⅳ 研究の仮説

#### 1 基本仮説

文学教材の読みにおいて、叙述に即した読みを指導することにより、想像力豊かな読みが育つであろう。

#### 2 作業仮説

(1) 仮説1（課題①②より）

読みの過程で、音読や書く活動をさせることにより、読み方を学習することができるであろう。

(2) 仮説2（課題③④より）

読みの過程で、心情や情景を読み深めていくための拠点となっている言葉、語句、文、文章

に着目させることにより、想像豊かな読みができるであろう。

(3) 仮説3 (課題⑤⑥より)

相互交流の場において、聞く、話す、等の活動を取り入れることにより、読みを深めたり、広げたりすることができるであろう。

## V 作業仮説の検証の手だて

### 1 「仮説1」の検証の手だて

#### (1) 音読の指導

一斉音読では、足を床に着け、正しい姿勢で立つ。友達の声聞きながら、口を大きく開け、しっかり自分の声を出して音読する。教師は、子供の読みの状態を確認しながら、机間巡視し、子供に沿った言葉をかける。いろいろな方法で音読させ、暗唱できるくらい読ませる。

・斉読、全文音読、部分音読、役割音読、その他

#### (2) 書く活動の指導

ワークシートやカード、読書カードに自分の思ったことや考えたこと、想像したことを書く。

特に、書くことに抵抗のある子供には、時間のゆとりを持たせ、教師や友達の支援を得る。

書く場面を多く設定し、書くことに慣れさせる。書く用紙は、色、大きさ、形、イラスト等、子供が興味・関心・意欲を持つように工夫する。

##### ① 文章を視写する活動

- ・視写することで、言葉の理解が一層深まり、表現の仕方がわかってくる。また、自分の書く文章に表現の仕方を取り入れたりできる。
- ・感動的な場面、印象的な場面は場面単位で、好きなところを抜き書きする。
- ・好きな表現、優れた表現は語句あるいは文単位で抜き書きする。
- ・人物描写、情景描写などの描写文を視写する。
- ・作品の冒頭、テーマ、クライマックス、結末などの部分を視写する。
- ・全文を視写する。

##### ② 叙述されている場面を絵や図や文に表現する活動

- ・想像したことを絵に描いたり、会話や内言

を吹き出しに書き込んだり、登場人物に話しかけたり、説明したりする。

##### ③ 感想をまとめる活動

- ・一読したあと、感想を書く。
- ・主題をふまえた感想・人物に対する感想を書く

##### ④ 板書したことを写す活動

- ・学習の流れが分かる板書

##### ⑤ 続き話・絵本・紙芝居・紙人形劇を作る活動

- ・続き話は、教材文の続きを想像して書き表す。
- ・絵本や紙芝居は、表紙づくりから始まり、場面ごとの主人公の様子や表情を絵や文に書き表す。
- ・紙人形劇は、ト書きやせりふを作るなかで自分の読みができイメージを広げることができる。

### 2 「仮説2」の検証の手だて

#### (1) 想像豊かな読みの指導

##### ① 叙述に即して想像する活動

- ・イメージを描かせる。
- ・題名からいろいろ連想する。
- ・挿し絵を見て、話の内容を想像する。
- ・場面や人物の様子をイメージ化する。
- ・人物の心の動きを読み取り、想像する。
- ・文脈に即して、表現の細かい点に注意して読み取らせる。
- ・表現されていることを、経験や既知のものと関係づけて想像を広げる。

##### ② 表現を叙述に即して読む活動

- ・表現の美しさを味わうことができる。
- ・人物の気持ちや行動の変容を読み取ることができる。

##### ③ 文脈に沿って語句を理解する活動

- ・キーワードをつかむ。

##### ④ あらすじをとらえる活動

- ・挿し絵を手がかりにしてとらえる。

##### ⑤ 動作化による活動

- ・物語の登場人物になることで、自己を容易に同化することができる。

- ⑥ 音声化による活動
  - ・表現された文章を声に出すことで、心情や情景を容易に理解することができる。
- ⑦ 五感によるイメージ化の活動
  - ・見る・聞く・話す・思う等の五感に訴えると容易に想像する事ができる。
- ⑧ 教具の活用
  - ・ペーパーサートや挿し絵等の教具の使用で想像力を容易にする。

### 3 「仮説3」の検証の手だて

#### (1) 話す活動

- ① 話し合い、考え合う活動
  - ・聞き手を意識しながら話す。
  - ・個に即して話型を提示し誰でも話せるように工夫する。
  - ・読んだ感想を発表する。
  - ・人物の気持ちや場面の様子を発表する。
  - ・読むことによって生じた問題を出し合う。
  - ・他の考えと比較し自分の考えを持つ。
- ② 童話・物語を友達に紹介する活動
  - ・ミニ感想文の紹介
  - ・本を選ぶ力

#### (2) 聞く活動

- ① 正しく聞き取る活動
  - ・話す相手を見て聞く。
  - ・指を折りながら聞いたり、メモをしながら聞いたりする。
  - ・話を終わりまで注意して聞き、自分の考えと比較しながら聞く。
  - ・話の順序を考えながら、内容を聞き取る。  
(順序を表す言葉や時間を表す言葉などに注意して聞き取らせるようにする)
  - ・学習形態の工夫。

## VI 仮説検証のための指導計画

### 1 単元名

「心のつながりを」

### 2 単元目標・指導事項

- ◎ 人物の行動や気持ちの移り変わりを考えなが

ら読むことができるようにする。

- ① 場面の様子や人物の行動や気持ちを想像しながら音読すること。

(指導要領・理解ウ)

- ② 人物の気持ちの移り変わりを想像しながら読むこと。

(理解カ)

- ③ 読みとった内容をもとに、文の続き方に気をつけて文章を書くこと。

(表現オ)

- ④ 語句の意味や使い方に関心を持つこと。

(言語事項エ)

### 3 単元について

この単元は、想像の世界に思いきりひたり、フィクションの中で人の立場や気持ちを思いやることのできる豊かな心を養うことを意図している。

小さい動物のねずみが主人公である「アレクサンダとぜんまいねずみ」の童話は、2年生の子どもたちにとって、親しみやすく興味をもって読み進められる内容である。アレクサンダとウイリーの交流から、アレクサンダの考え方の変化を読み取り、生きることや友情について考えさせる教材である。物語を楽しみながら、人への思いやりの心を広げていくことができるように配慮したい。

単元の目標「人物の行動や気持ちの移り変わりを考えながら読むことができるようにする。」を達成するために次のような手立てを工夫する。題名からのイメージづくり、全文音読、書く活動を通して、叙述に即した読みをさせ、人物の行動や気持ちの移り変わりを想像しながら読むことができるようにする。

### 4 教材名

- ◎ 「アレクサンダとぜんまいねずみ」

レオ＝レオニ著 谷川俊太郎訳 教出二年下

### 5 教材について

#### (1) 主題について

「自分の力で生きることと友をもつことのすばらしさ」

#### (2) 内容について

常に人間に追われ、生きるための食料を得るのに苦勞しているアレクサンダにとって、食べ

る心配もなく人間にかわいがられるぜんまいねずみは、うらやましいあこがれの対象である。それが実は、人間によってねじを巻かれなければ動くことができず、飽きられれば捨てられるしかない存在であることを知る。しかし、友情が芽生えることで、ウイリーが生きているねずみになることを願うようになるのである。

第二次で「スイミー」、第三次で「読書の計画」を取り扱うことで、より豊かな想像力を養う事と生活の中での読書の広がりを目指す。

### (3) 教材の特色

#### ① 生きるということの意味の把握。

この作品の主題は、生命の賛歌である。たとえ、人間に嫌われ、ほうきで追われても、生きたねずみはすばらしいのであり、ぜんまいねずみの幸せは、みせかけである。

2年生の子どもたちにとってこの主題を理解するのは難しい。しかし、初めのうちは気づかないが、読みを深めることによって主題をとらえることができるようになる。

#### ② ストーリーの楽しさを味わう。

この作品は、アレクサンダの気持ちの移り変わりがはっきりしていて、それが会話や行動を通して生き生きと描かれている。「それからどうなる」「そして、どうなっていく」というストーリー性が豊かである。語り手がまさにその場で語りかけるように話が進行していく。何度読んでも楽しめるという特色も持っている。

#### ③ フィクションの真実性を読む。

この作品の登場人物は、二ひきのねずみを中心に描かれており、想像の世界であることは、どの子にも明らかである。しかし、登場人物の行動や心情には真実性があり、共感の心をもって読むことができる。

#### ④ イメージの広がりをつくる。

この作品の中で、子どもたちは想像の世界に思い切り遊ぶことが可能である。フィクションの中で場面や人物などにイメージを広げていくことで楽しさを味わうことができる。また、紙をちぎり、はりあわせたような画面の挿し絵は、新鮮さがあり子どものイメージを

広げる。

#### ⑤ 多様に書かせる場をつくる。

この作品は、登場人物の気持ちを吹き出しに書く、様子を書く、手紙を書くというように書くことによって読みを深める場を多くもっている。

#### ⑥ 選びぬかれた言語の作品である。

この作品は、レオ＝レオニの原作で、谷川俊太郎の訳である。詩人である谷川俊太郎の訳がすばらしく、一つ一つの言葉も選びぬかれている。生きることや友情について、言葉を通して考えさせたい。

#### ⑦ 同一作者の読書への発展性につながる。

レオ＝レオニの作品の主人公は、いつも小さな動物である。ねずみ・かたつむり・さかな等で、身近で小さい動物が子どもたちは好きである。それだけに、レオ＝レオニの他の作品を読んでみたいと言う読書への広がりをつくる作品である。

## 6 学習指導計画（11時間）

第一次「アレクサンダとぜんまいねずみ」を読む  
（8時間）

- ① 全文を読んで話し合う。
- ② 登場人物を知り、あらすじを読む。
- ③ 人間においかけるアレクサンダを読む。
- ④ ぜんまいねずみのウイリーと出会い、ウイリーをうらやむアレクサンダを読む。
- ⑤ 小石をさがし、ウイリーのかなしい話を聞くアレクサンダを読む。
- ⑥ とかげに願いを頼むアレクサンダを読む。  
（公開授業）
- ⑦ ねがいがかない夜明けまでおどるアレクサンダとウイリーを読み、手紙を書く。
- ⑧ つづき話を書く。

第二次「スイミー」を読む。（1時間）

- ① 「スイミー」を読み、心に残ったことを話し合う。

第三次 読書計画を立てる。（2時間）

- ① レオ＝レオニの作品を知り、読みたい本の計画を立てる。



7 授業の展開と結果・考察

第一次「アレクサンダとぜんまいねずみ」を読む。

○1時 ねらい：全文を読み心に残ったことを書き、話し合うことができる。

学 習 活 動	読みの手だてと言葉	指導上の留意点と支援	評 価 事 項
1 単元名について話し合う。	・「心のつながり」	・「心」「つながり」を言い替え、反対語、短文等を使って話し合わせる。	・単元の意味が分かる。
2 題名や挿し絵からお話を想像する	・「アレクサンダとぜんまいねずみ」	・題名を全員に音読させる。	・聞くことができる。
3 読み聞かせをする		・教師による読み聞かせにしたい。	
4 心に残ったことを書く。	・範読（全文） ・イメージマップ	・5分間、題名からイメージしたことを書かせる。（事前調査） ・机間巡視をし、書けない子には助言をする。	・初発の感想とイメージマップを書くことができる。
5 発表する。		・聞き手意識を持たせて発表させる。	・発表することができる。
6 次時のめあてを知る。	・登場人物 あらすじ	・どんな主人公か、お話か次時につなげる。	

（ワークシート①）：全文を読み、おもしろかったところや心にのこったことを書きましょう。

○2時 ねらい：登場人物を知り、あらすじを読むことができる。

学 習 活 動	読みの手だてと言葉	指導上の留意点と支援	評 価 事 項
1 題名を板書、学習のめあてを知る。	・登場人物 あらすじ	・児童が板書する。	・思い出す言葉を書いて発表することができる。 ・しっかり声を出して読むことができる。
2 題名から思い出す言葉を書いて発表する。	・「アレクサンダとぜんまいねずみ」から思い出す言葉	・一人一人の発表により全文を想起させ、学習の導入にしたい。（全員発表）	
3 音読する（全文）	・斉読	・子どもを起立させ、声をそろえて（、）や（。）に気をつけて読ませたい。 ・しっかり声が出ているか、読めない子には助言をしながら机間巡視をする。	
4 登場人物に線を引き、話し合う。	・「アレクサンダ」 ・「ウィリー」 ・「アニー」 ・「とかげ」	・「だれが」「どうした」お話を話し合わせて書けるようにさせる。 ・みんなでまとめた文を書かせる。	・登場人物を書くことができる。
5 あらすじを読む。	・挿し絵 ペープサート	・挿し絵を順序よく並べさせることであらすじをつかませる。	・あらすじをつかむことができる。
6 学習計画を立てる。		・学習の課題を話し合い、子どもに課題を書かせる。	
7 次時のめあてを持つ。	・人間においかけられるアレクサンダを読む。	・児童が準備する。	

（ワークシート②）：だれが出てくるかな、どんなお話かな。

○3時 ねらい：人間においかけられるアレクサンダを想像しながら読むことができる。

学 習 活 動	読みの手だてと言葉	指導上の留意点と支援	評 価 事 項
1 題名を板書、学習のめあてを知る。	・「人間においかけられるアレクサンダ」を読む。	・児童が板書する。	
2 題名から思い出す言葉を書いて発表する。	・「アレクサンダとぜんまいねずみ」から思い出す言葉。	・全員発表により全文を想起させ学習の導入にしたい。	
3 音読する(全文)	・斉読	・一人一人がしっかり声が出せるように音読させる。	・想像して書くことができる。
4 挿し絵から逃げる様子を想像して書く。	・表情 ・内言 ・音 ・場所	・挿し絵からアレクサンダの表情や心の中で言っていること、どんな音が聞こえるかイメージさせる。	
5 逃げる時の気持ちが表現されている言葉を想像し、書いて話し合う。	・ちっちゃな足の出せるかぎりのスピード ・あなにむかって走った ・一つ二つのパンくずだけ ・ひめいをあげた ・おいかけたりする	・話型にはめて話させる。 ～のことばから、～は ～だろうなあと思いました。 〃 見えました。 〃 聞こえました。 〃 わかりました。	・聞こえるように話すことができる。
6 次時のめあてを持つ。	・ウィリーに会うアレクサンダを読む。	・児童が準備する。	

(ワークシート③)：おいかけられるアレクサンダのようすや気持ちを思いうかべましょう。(表情、内言、音、場所)

ワークシート③



① 学習活動4の考察

上図のワークシートは、教科書の挿し絵を使って作成した。音読した後、アレクサンダについて①どんな表情かな。②心の中で何と言っているかな。③どんな音が聞こえるかな。④どんな場所かな。と想像させた。

書き始めるのに時間がかかった。一人の子が、「見つかったらたいへんだ。かくれる。」と何気なく

ささやいた。「そうだね、このように書くといいね。」とほめてやると、子どもたちは、わかったという顔で書き始めた。子どもたちは、「①びっくりして、早く逃げなくっちゃと言う顔。いそいでいる顔。②「うわ！たすけてくれ。」「にげろ、にげろ。」③「ガリガリ、ガチャン、ゴロゴロ、パリン④びかびかの台所、きれいな台所。」と夢中になって書いていた。5分間の予定が延びてしまい時間はかかったが、子どもたちは喜んで書いていた。

教師が予想していない事も子どもたちは想像した。追いかけている人間の台詞「キャッ！ねずみよ。はやくつかまえて。」「あっちへ行きなさい。ほうきでたたくわよ。」や絵を楽しんで書いていた。挿し絵は、読み手のイメージを豊かにしてくれた。それは、主人公の置かれている状況や人物像を把握させるのに効果的であった。

② 学習活動5の考察

アレクサンダの逃げる気持ちが表現されている言葉を見つけて想像させた。子どもたちは、読みの予想どおり言葉を見つけ想像することができた。しかし、「あなにむかって走った」は、出てこなかった。「あな」に対するイメージがまだ育っていないのかもしれない。次時の学習で押さえない。

言葉に即し、挿し絵を補い、書く活動や話し合いを学習活動に取り入れると、より深みのある(想像豊かな)読みができた。

○4時 ねらい：ウイリーに出会い、彼をうらやむアレクサンダを読むことができる。

学 習 活 動	読みの手だてと言葉	指導上の留意点と支援	評 価 事 項
1 題名を板書、学習のめあてを知る。 2 題名から思い出す言葉を書いて発表する。 3 音読する。(全文) 4 アレクサンダとウイリーの違いを見つけて書き、発表する。 5 ひとりぼっちのアレクサンダを想像する。 6 次時のめあてを持つ。	・「アレクサンダとぜんまいねずみ」から思い出す言葉 ・斉読 アレクサンダ ・あまり大事にされない ・ひとりぼっち ウイリー ・ふつうのねずみじゃない ・二つの車 ・せなかにはねじ ・お気に入りのおもちゃ ・ちやほやして ・かわいがってくれる ・うらやんだ ・「ああ、」 ・ためいき ウイリーの悲しい話を聞くアレクサンダを読む。	・児童が板書する。 ・全員発表により全文を想起させ、学習の導入にしたい。 ・友だちの音読を聞き、しっかり声を出して読ませたい。 ・ウイリーと対比しながらアレクサンダをとらえさせる。 ・教科書に叙述されてない言葉も考えさせる。 ・どんな顔が見えるかな。 ・何と言っているのかな。 ・どんな気持ちかな。 ・児童が準備する。	・二人の違いを書くことができる。 ・発表することができる。 ・書くことができる。

(ワークシート④)：アレクサンダとウイリーのねずみのちがいをみつけましょう。  
 かくれ家のくらやみの中で一人ぼっちのアレクサンダの気持ちを考えましょう。

○5時 ねらい：とかけ、小石と関わる中で、ウイリーの悲しい話を読むことができる。

学 習 活 動	読みの手だてと言葉	指導上の留意点と支援	評 価 事 項
1 題名を板書、学習のめあてを知る。 2 題名から思い出す言葉を書いて発表する。 3 音読する。(全文) 4 とかけと会い願いを話すアレクサンダを読む。 5 アレクサンダがむらさきの小石をさがす様子を視写する。 6 ウイリーの悲しい話について想像する。 7 次時のめあてを持つ。	・「アレクサンダとぜんまいねずみ」から思い出す言葉 ・斉読 ・ふしぎな話 ・かえられるってほんと？ ・ふるえ声 ・来る日も来る日も ・さがしつづけた ・だめだった ・一つもなかった ・つかれはて ・なかんばかり ・かわいそうに、かわいそうなウイリー！ とかけに願いを頼むアレクサンダを読む。	・児童が板書する。 ・全員発表により全文を想起させ、学習の導入にしたい。 ・「 」の文に注意して、動作化し、ペープサートを使って読ませたい。 ・いっしょうけんめい小石をさがし続けるアレクサンダの気持ちになって視写をさせる。 ・文意識をもたせる。 ・ウイリーの惨めな姿をしっかりとらえさせることで、次時の読みにつなげたい。 ・児童が準備する。	・ていねいに書くことができる。

(ワークシート⑤)：アレクサンダがむらさきの小石をさがすようすを書きましょう。(視写)  
 かなしい話について考えましょう。

○6時 公開授業 (6/11時)

1 ねらい

捨てられたウイリーを見たアレクサンダは、とかけに願いを頼むまでの気持ちの変容を読み取ることができるようにする。

2 授業仮説

◎読みの過程で、①「どきどきさせて」「しっかりうでにだき」「走り出た」「いきをきらせて」等のことばに着目させる、②「ぼくは…」の内言を考えさせる、③子どもが主人公に語りかけ

る場面を設定し、それを書かせることによって、子どもはアレクサンダの気持ちの変化を読み取ることができるであろう。

◎読みの過程で、ペープサートや挿し絵を活用することによって、子どもは主人公を身近に感じ心情を豊かに想像することができるであろう。

◎発表の場において、聞く、話す等の活動を取り入れることによって、読みを深めたり、広げたりすることができるであろう。

3 展開

学 習 活 動	読みの手だてと言葉	指導上の留意点と支援	評 価 事 項
1 題名を板書する。 2 音読する。(全文)  3 思い出す言葉を発表する。  4 学習のめあてと挿し絵を提示する。	全員起立し姿勢を正して、斉読する。  「アレクサンダとぜんまいねずみ」から思い出す言葉。  ウイリーをたすけるアレクサンダの気持ちのかわり方を読む。	・児童(板書) ・しっかり声を出して読むことで読みの力をつけたい。 ・机間巡視をする。 ・一人一人の発表により作品のイメージをもたせ学習の導入にしたい。  ・児童が提示する。	・音読 [(,)や(。)]に気をつけはっきりした発音で読むことができる。 ・書く(思い出す言葉を書いて発表することができる。)
5 小石を抱いてとかげのところへ走っていく時のアレクサンダの気持ちを考えましょう。  ・音読する。  ・サイドラインをひく。  ・ことばをカードに書く。  ・カードをもとに話し合う。	・グループ読み 「 」の文…… 全員 地の文…… 教師  ・どきどきさせて ・しっかりうでにだき ・走り出た ・いきをきらして等	・ゆっくり、はっきり、しっかり読ませたい。 ・「 」の文は気持ちをこめて読ませたい。  ・サイドラインをひく。ことばの中から話したいことを一つだけ選んでカードに書かせる。  ・話型(個に即して提示する) ～のことばから、～は ～だろうなあと思いました。 見えました。 聞こえました。 わかりました。	・聞く  ・書く(気持ちを表すことばにサイドラインをひくことができる。)  ・発表する(書いたことを発表することができる。) ・聞く(自分のカードと比較しながら聞くことができる)
6 「ほくは…」と言いかけてやめた時のアレクサンダの気持ちを考えましょう。  ・音読する。  ・ことばを考えて書く。  ・ことばを入れて発表する。	・「ほくは…」	・アレクサンダの考えは、どのように変わったのか想像させたい。	・部分音読  ・書く(アレクサンダの内言を書くことができる。)
7 アレクサンダに自分が思ったことを話しましょう。  ・ワークシートに書く。  ・発表する。  8 視写をする。  9 次時のめあてを持つ。	・アレクサンダのペーパーサートに語りかけるように書く。  ・「とかげよ、とかげ。ウイリーをほくみみたいなねずみにかえてくれる？」 ・願いがかない夜明けまでおどりつづける二人を読む。	・アレクサンダに感動したことを短いことばで表現させる。  ・アレクサンダの気持ちを想像しながら書かせる。  ・児童が準備する。	・書く(思ったことを書くことができる。) ・発表する。 ・聞く。 ・書く。(丁寧に間違えることなく書くことができる)

#### 4 評価の観点

- (1) アレクサンダの気持ちが分かる言葉や文に線を引き、想像することができたか。
- (2) 聞く、話す、読む、書く等の活動ができ、読みを深めたり、広げたりすることができたか。

#### 5 結果と考察

授業の導入は、一斉音読から始めた。緊張の中で、子供たちは、自分の声を確認ながら斉読する。その声はだんだん大きくなり、一部は暗唱している子もいる。読み終わると同時に、題名「アレクサンダとぜんまいねずみ」から思い出す言葉を発表させ、作品のイメージを持たせた。順序よく全員発表する頃には、いつもの顔になっている。子どもの文字で書かれた学習のめあて「ウイリーをたすけるアレクサンダの気持ちのかわり方を読みましょう。」や挿し絵を黒板に提示し、今日の学習のねらいを確認する。



図1 一斉音読の様子

#### ① 学習活動⑤の結果と考察

小石を抱いて、とかげのところへ走っていく時のアレクサンダの気持ちを考えましょう。

図1は、地の文(教師)と会話の文(子供)にわけ一斉音読した写真である。その後、アレクサンダの気持ちがわかる言葉に線を引かせる。その中から一つ選ばせ、子供の選んだ水色のカード(B4の縦1/2サイズ)に書かせた。さらに、その言葉から想像したことを書かせた。子供たちの書いたことをまとめてみると下記ようになる。

言葉	イメージした言葉の例
むねをときどきさかせて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ やっとむらさきの小石をみつけて、むねをときどきさせてはやくとかげのところに行こうと思っている顔が見えました。</li> <li>・ いっしょうけんめいさがしてやっと見つかったと言う顔が見えました。</li> <li>・ しんぞうがときどきなっている音が聞こえました。(人数・12人)</li> </ul>
大事な小石	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ぜったいに自分のねがいをかなえるぞという顔が見えました。</li> <li>・ いままでさがしてやっと見つかったから大事にうでにだいたと思います。</li> <li>・ 大事な小石はほんとうに大事なんだなあと思いました。(6人)</li> </ul>
しっかりうでにだき	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ むらさきの小石をなくさないようにとっても大事にしていると思います。</li> <li>・ むねをときどきさせながら、むらさきの小石をしっかりうでにだいて、やっとのことでさがしたと思います。(5人)</li> </ul>
にわへと走り出た	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ もう走れないぐらいのはやさで走ったと思います。</li> <li>・ いそいでたすけようとしたと思いました。(3人)</li> </ul>
いきをきらせて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ アレクサンダは、とってもはやく、ビュンビュンスピードを出して走ったんだなあと思いました。</li> <li>・ いっしょうけんめい走っている顔が見えました。</li> <li>・ いきをハーハーしていることがわかりました。(8人)</li> </ul>

教師の予想とほとんど同じような「言葉」が出さ

れた。ところが、「大事な小石」は予想しなかった。前時の小石をさがす場面が心に残っていたのであろう。願いをかなえてくれる「大事な小石」である。

走つて顔が見えなかった。じいさん	アレクサンダがむねをどきどきさせて、顔をみえました。	アレクサンダは、ちっちゃな足の出せるかぎりのスピードで、あなにむかって走った。	アレクサンダは、むらさきの小石をいっしょくけん	しんぞうがどきどきした。もういっしょくけん	むねをどきどきさせて
------------------	----------------------------	---	-------------------------	-----------------------	------------

図2 言葉からのイメージ

図2の「むねをどきどきさせて」のことは多く反応した。心臓をときめかしている音、はやくとかけのところへ行きたいと思っている様子や見えたことでもいろいろな顔が見える。

「にわへと走り出た」のイメージでは、「もう走れないくらいのはやさ」の言葉は、教科書に「アレクサンダは、ちっちゃな足の出せるかぎりのスピードで、あなにむかって走った。」の表現を自分のものとして取り入れている。

アレクサンダは、いきをハハーして、ビュンビュン走りました。	アレクサンダは、いきをハハーして、ビュンビュン走りました。	アレクサンダは、いきをハハーして、ビュンビュン走りました。	アレクサンダは、いきをハハーして、ビュンビュン走りました。	アレクサンダは、いきをハハーして、ビュンビュン走りました。	いきをハハーして
-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	----------

図3 言葉からのイメージ

「いきをきらして」では、「いきをハハーして」「ビュンビュン走る」等、自分の体験からイメージしている。分からない子には、動作化をすると「わかった。」という顔でうなずいた。

アレクサンダが、むらさきの小石をやっとで見つけ、とかげに会いにいこうとする気持ち、願いをかなえようと焦る気持ちが書けている。子どもたちが主人公と同化していることがよくわかる表現である。

話し合いの場で、カードに書く作業を通して発表させると、意欲的になりどの子も自信を持って発表する。また、比較しながら聞き、考えながら聞くことができる。



図4 相互交流の様子

発表者は、発表後「わたしと同じ言葉の人はいませんか。」と呼びかける。同じ言葉の人は、一斉に立って、一人ずつ自分のイメージをどんどん発表する。みんなが、一つの言葉に対するイメージを全部発表する頃には、その言葉の全体像が見えてくる。話すことで、読みの深まりと広がりができ、イメージを共有することができた。

その時、発表者は、自分から一番遠い友だち（決めておく）を見て話すと、自然と聞こえるような声が出るように指導する。

## ② 学習活動6の結果と考察

「ほくは・・・」と言いかけてやめた時のアレクサンダの気持ちを考えましょう。

「ほくは・・・」と言いかけてやめたアレクサンダの内言を想像させワークシートに書かせた。子どもは、「ほんとうはウイリーみたいになりたいけど、おもちゃになったらすてられるかもしれない。やっぱりウイリーをほくみたいにして。」「ぜんまいねずみになりたかったけど、ふるくなったらすてられ

るから生きているねずみのほうがいいなあ。」「ウイリーみたいになりたかったけど、ウイリーはぼくの一番の友だちだから、ウイリーをぼくみたいなねずみにかえればいいんだ。」等とアレクサンダの気持ちの変化を書いている。アレクサンダの自分の願いより友だちのことを考えた気持ちの変化が読みとれる。

### ③ 学習活動7の結果と考察

アレクサンダに自分が思ったことを話しましょう。

自分の願いより友だちのことを考えたアレクサンダに、何か言葉をかけてあげようと呼びかけた。

始めはどういうふうに言うのかよくわからず、とまどっていた。が、教師が小さな声でアレクサンダのペープサートに話しかける様子を見て、子どもたちは、すぐに反応し、ワークシートに自分の思いを次のように書いていった。「アレクサンダは、友だち思いだね。」「アレクサンダってほんとうにやさし

いんだね。」「とってもかしこいんだな。」「ウイリーがごみばこにすてられなくてよかったね。」「とってもウイリーがだいじなんだなあ」アレクサンダの気持ちをくみ取った呼びかけの表現であった。

中には「アレクサンダは、すごいなあ。」と呼びかけた子がいた。他人のことよりも自分のことが中心になりがちな二年生の子どもにとって、アレクサンダのウイリーを思いやる行動は、すごい存在だと考えたのであろう。



図5 ペープサートを活用しての相互交流の場

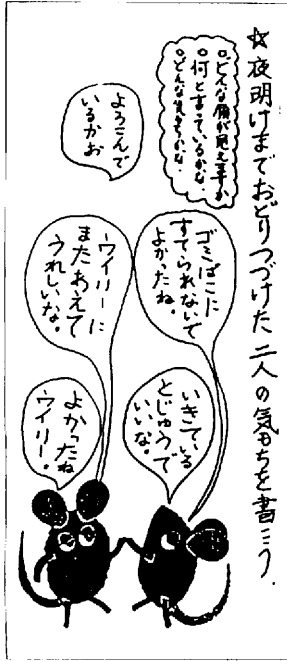
○7時 ねらい：願いがかない夜明けまでおどり続けた二人を想像して読むことができる。

学 習 活 動	読みの手だてと言葉	指導上の留意点と支援	評 価 事 項
1 題名を板書，学習のめあてを知る。		・児童が板書する。	
2 題名から思い出す言葉を書いて発表する。	・「アレクサンダとぜんまいねずみ」から思い出す言葉	・全員発表により全文を想起させ、学習の導入にしたい。	
3 音読する。(全文)	・斉読	・「 」の文は気持ちをこめて、暗唱するように読ませたい。	
4 夜明けまでおどりつづけた二人を読み，書いて発表する。	・おもい心 ・用心ぶかく ・こわごわ ・だきしめ ・走り出た ・夜明けまでおどりつづけた	・「どんな顔がみえますか」「何とっているかな」「どんな気もちかな」を考えさせる。 ・挿し絵を手がかりにして、想像させる。	
5 アレクサンダやウイリーに手紙を書こう。	・お話をするように語る。	・手紙の書き方を知り、短い文で表現させる。	・手紙文を書くことができる。
6 次時のめあてを持つ。	つづき話を書こう。	・児童が準備する。	

(ワークシート⑦)：夜明けまでおどりつづけた二人の気持ちを書きましょう。

アレクサンダやウイリーに手紙を書きましょう。

ワークシート⑦



① 学習活動4の考察

左図は、夜明けまで踊り続けたアレクサンダとワイリーの気持ちを想像したワークシートである。その他に、アレクサンダは「生きているねずみになってよかったね。」「ぼくたちは、友だちだもん。」「今日から一緒に楽しい時をすごそうね。」と書いた。ワイリーは「ぼくを助けてくれて、ありがとう。」「ほんとうのねずみになれてよかったなあ。」

と書いた。子供達は、いつまでもおどろいづづける二人の気持ちに同化して書いていた。そこには、主題に沿った会話が展開されていた。

おどる二人の挿し絵を見せて、「右と左、どちらがアレクサンダでしょう。」と呼びかけた。ほとんどの子は、「右です。」と答えた。「どうしてですか。」と質問すると、「先生、本の絵は、右にアレクサンダがいるよ。」と言った。そのとおりである。

絵本を調べてみると、右とじで教科書と反対である。右とじの挿し絵は反対にアレクサンダが位置しているが、教科書の最後の場面の挿し絵は、絵本のとおりであった。ほんとうは、左が、アレクサンダ

○8時 ねらい：つづき話を書くことができる。

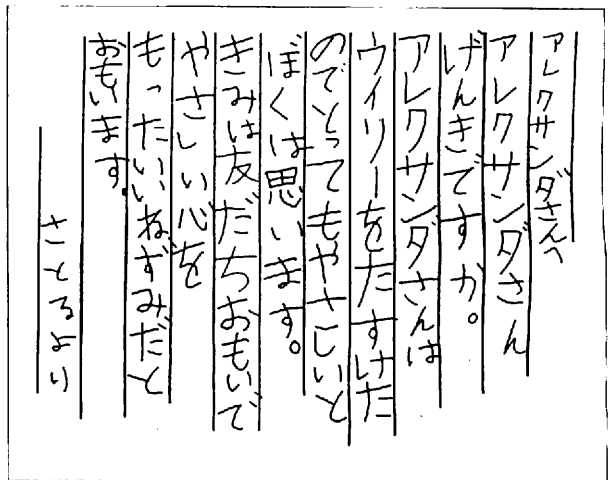
学 習 活 動	読みの手だてと言葉	指導上の留意点と支援	評 価 事 項
1 題名を板書、学習のめあてを知る。		・児童が板書する。	
2 題名から思い出す言葉を書いて発表する。	・「アレクサンダとぜんまいねずみ」から思い出す言葉	・5分間、題名からイメージしたことを書かせる。(事後調査)	・豊かにイメージして書くことができる。
3 音読する。(全文)	・斉読	・暗唱できるように読ませたい。	・気持ちをこめて読むことができる。
4 つづき話を書く		・身近な題材(遊び)で、つづき話を書かせる。 ・書いた作品は、つづき話コーナーに並べて読ませたい。	・つづき話を書くことができる。
5 次時のめあてを持つ。	スイミーを読む。	・児童が準備する。	

(ワークシート⑧)：つづき話を書きましょう。

である。このように説明すると子どもたちは納得してくれた。子どもたちは、物語が進むにつれて、主人公の動きを挿し絵から読んでいたことに驚いた。

② 学習活動5の考察

アレクサンダに手紙を書いた子どもは、16人で、ワイリーには、19人であった。手紙の内容は、友だちを大事にすること、感謝の言葉、共に生きていこう、楽しく遊ぼう等が書かれていた。



自分と異なる主人公に会い、想像の世界で彼の生き方を見つめ、また、自分の生き方を見つめ直して、自分を豊かにするような手紙があった。「ぼくは、アレクサンダみたいに優しい心になって、いっぱいいっぱいお友だちをつくりたいです。」「ワイリーさんやアレクサンダさんのおかげで、いろいろな気持ちとかがいっぱいわかりました。」短い文の手紙は、アレクサンダと共感できる場となった。



・結果と考察

「童話や物語を読んだ後、どんな学習がしたいですか。」の事前調査で子どもたちは、「つづき話を書きたい。」が第一位であったので、本時の計画をした。

つづき話を書き慣れていない子どもたちは「先生、どのように書きますか。」と聞いてきた。「学校行事や遊び等の身近な題材を教材文に似せて書いてみよう。」と話し合った結果、次のような題が出た。

- ・「アレクサンダとウイリーの運動会」
- ・「アレクサンダとウイリーのさんぽ」
- ・「アレクサンダとウイリーのたこあげ」
- ・「アレクサンダとウイリーのサッカー」
- ・「アレクサンダとウイリーのぼうけん」

また、アレクサンダやウイリーらしい行動と会話が書かれていた。つづき話の表現には、教材文の言葉、文、文章が引用され、自分の生活や経験したことと関わらせて想像しながら書いていた。

- ・「もう力がなくなりそうなのはやさでにげた。」
- ・「走れるかざりのはやさでチーズのところへ」
- ・「ガシャン、パリーン」
- ・「でも」
- ・「さっそく」
- ・「何日も何日も」
- ・「とうとう」
- ・「とつぜん目の前に」

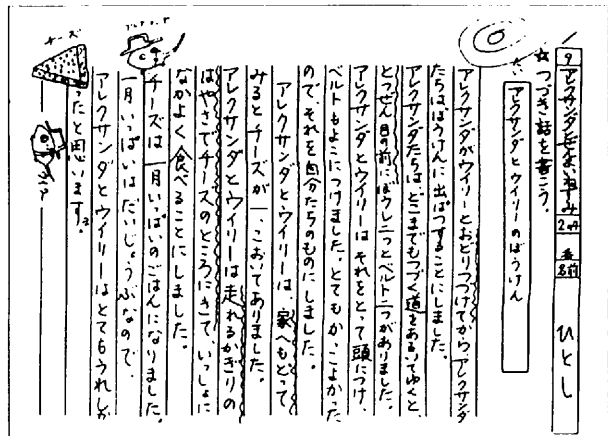
つづき話を書くことで、教材文の言葉を自分の言葉にし、言葉の場面をイメージ化することができた。

S子のつづき話の事例3の考察

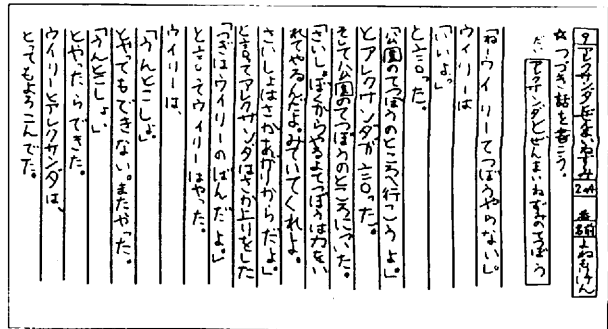
物語に沿って挿し絵を書き、その下に文を書いている。2時の学習で挿し絵を使ってあらすじを捉えた学習が活かされている。また、教材文の「ある日の昼の時」「でも」「つぎの日」「さっそく」の言葉が使われている。登場人物にアニーが出てくる。教材文のようにアニーは、飽きっぽい行動をしていた。アレクサンダは、ウイリーにいろいろなことを教えていく。二人がおいもの種をまき、育てて収穫するまでのお話である。アレクサンダの生き方にS子の願いが表現されていた。

つづき話の事例1

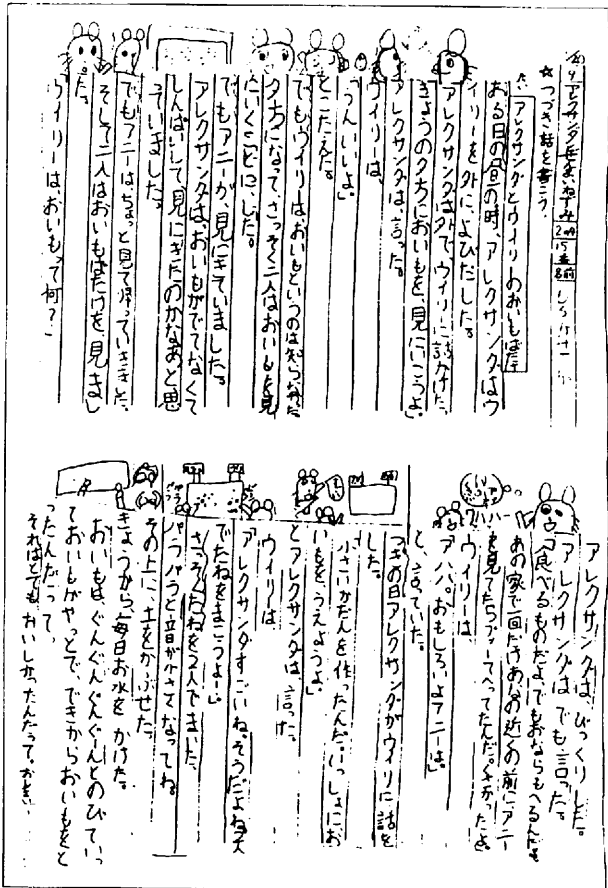
ワークシート⑧



つづき話の事例2



つづき話の事例3



第二次 「スイミー」を読む。

○9時 ねらい：「スイミー」を読み、心に残ったことを書くことができる。

学 習 活 動	読みの手だてと言葉	指導上の留意点と支援	評 価 事 項
1 題名を板書，学習のめあてを知る。	「スイミー」	・児童が板書する。	
2 題名や挿し絵から内容を予想する。		・作者がレオ＝レオニで同じ人の作品であることを気づかせたい。	
3 読み聞かせ。 (全文)	・範読	・学習形態を変えて読み聞かせをする。(教師のまわりにすわらせる)	・順序を考えながら、最後まで聞くことができる。
4 心に残ったことを話し合う。	・広い海のどこかに ・小さな黒いさかな ・スイミー		
5 心に残ったことを書く。	・考えに考えた	・読書カードに書かせる。	・感想を書くことができる。
6 次時のめあてを持つ。	レオ＝レオニのほかの作品を読もう。	・児童が準備する。	

(読書カード)：魚のイラストカード

第三次 読みを広げる。

○10・11時 ねらい：レオ＝レオニの作品を知り、読書の計画を立てることができる。

学 習 活 動	読みの手だてと言葉	指導上の留意点と支援	評 価 事 項
1 学習のめあてを知る。		・児童が板書する。	
2 レオ＝レオニの作品を知る。	作品名 ・フレデリック ・ティリーのかべ ・さかなはさかな ・6わのからす	・23種類の作品をブックトークで紹介する。 ・レオ＝レオニ作品コーナーを作りいつでも読めるように環境を整える。	
3 計画を立てて読む。		・ワークシートの欄に読みたい作品に印をつけて読ませたい。	・作品を読むことができる。
4 心に残ったことを絵や文に書く。		・読書カードは、大きさ、色、形を工夫する。 ・休み時間家庭学習なども活用する。	・感想を絵や文に書くことができる。

(ワークシート⑩)：レオ＝レオニの作品です。読みたい本に○じるしを書いて下さい。  
レオ＝レオニの作品を読んで思ったことを書きましょう。

(読書カード)：(用紙の色、イラスト等の工夫)



## Ⅶ 研究の成果と考察

「アレクサンダとぜんまいねずみ」の指導を終えて、学級全体における「読み・書き・言葉・想像力」の事前・事後の子供の想像豊かな読みが、どのように変容していったか、仮説ごとに考察したい。

### 1 「仮説1」の結果と考察

#### (1) 読み

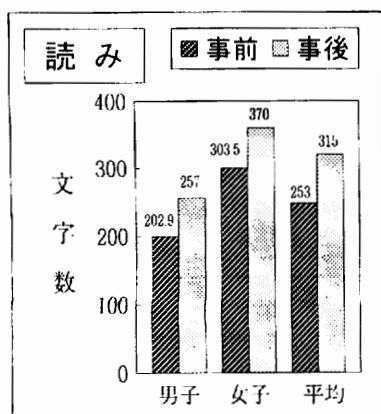


図6 1分間に読めた文字数

女子は、事前・事後の調査が、1分間に250（「音読・朗読」の指導）の目標を越えている。が、事前の男子は、目標を達成したのは、5人

女子は、事前・事後の調査が、1分間に250（「音読・朗読」の指導）の目標を越えている。が、事前の男子は、目標を達成したのは、5人

のみで少なかった。毎時間の学習中に斉読、部分音読、役割音読などの声を出して読む学習を意図的・計画的に取り入れることによって、読み手が、内容を考える読みができる。そのためには、意味の切れ目、文末表現、登場人物の様子や気持ち、時間や場所などを表している言葉に注意し、その言葉を印象付けるように読むことである。また、会話文には、登場人物の心情がよく表れていることがわかる。このような読みをした結果、事後調査では、男子の平均が目標に近づき努力のあとが見えた。

#### (2) 書き（視写力）

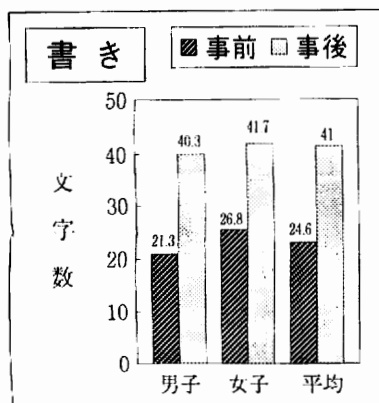


図7 1分間の視写の文字数

女子は、事前・事後の調査が、1分間に25字（「総合物語文」の指導）の目標を越えている。が、事前の男子は、目標を達成したのは、4人で少なかった。

書くことを伸ばす手だてとして、学習の中に書く場を多く持たせることだと考える。そこで、言葉から

想像したことをカードに書いたり、視写したり、登場人物の表情、内言、気持ち等を書いた。書いた結果として、ほとんどの子が目標を達成できたと思う。中には、速く書きたいあまりに文字が雑になった子もいた。教師の配慮が必要であった。

#### 仮説1の成果

読みの前提条件である音読、つまり、すらすら読めるようにすることと、読めたことを整理して書くことは、事前と事後の調査を比較して好ましい結果が出たと捉える。

### 2 「仮説2」の結果と考察

#### (1) イメージ・マップ

##### ① イメージ・マップの語い数の変容（表2）

	初読時	学習終了時
人員	35人	33人
記述ワード数	212	443
一人平均	6	13.4
記述例 (5以上)	ウイリー (30) むらさきの小石 (24) とかけ (23) アレクサンダ (22) まん月 (18) ぜんまいねずみ (12) ねじ (7) 小さい (5) はいいろの (5) ころろ (5) かわいい (5)	友だち (25) ウイリー (25) アレクサンダ (23) むらさきの小石 (23) しっぽ (21) やさしい (18) ねずみ (18) 夜明けまで (16) まん月 (13) あし (13) スピード (10) ねじ (9) ころろ (8) しんゆう (8) め (8) ちいさい (7) みみ (7) ゆうじょう (7) 用心ぶかく (7) アニー (7) 生きる (6) 生きてるねずみ (6) 思いやり (5)

5分間、題名からイメージを書かせた。表2の一人平均の数をみると、初読時6ワードと比べて、終了時は13.4ワードに増え、約2.2倍になっている。これは、作品に対して想像豊かな読みができたと考えられる。また、イメージした言葉の記述例をみると初読時では、登場人物や教材文の言葉が多い。ということは、初読時の子どもの意識や関心が、人物やあらすじに向けられていると考えられる。それが、終了時は、主題に関する言葉や人物の気持ちを表す言葉を書いている子供が増えている。例えば、表現

の仕方は違うが「友だち」を友じょう、しんゆう、友人、心のつながり、「生まれかわる」を生きる、じゆう、「思いやり」をしんせつ、やさしい、たすける、友のためにがんばる等とイメージしている。

これは、子供があらすじだけでなく、登場人物の気持ちになって、想像豊かに読み、主題に迫る読みができたと考える。また、学習のめあてに沿って読み深めた結果、子供達の変容が見られたと捉える。

② 抽出児のイメージ・マップの変容

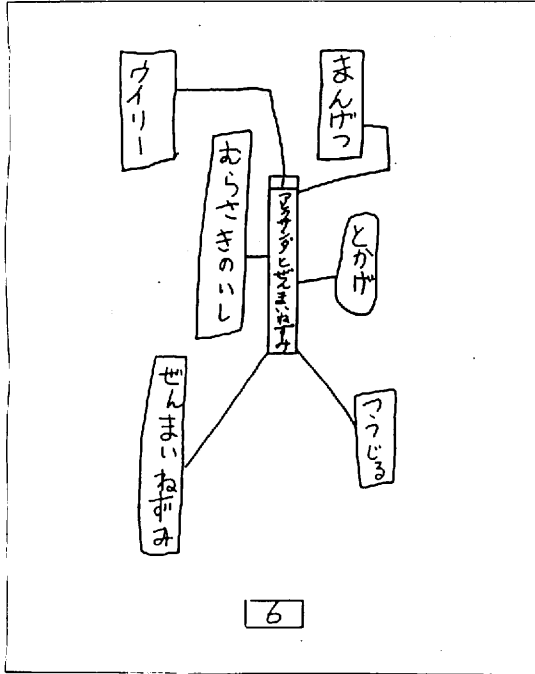


図8 初読時のイメージ・マップ

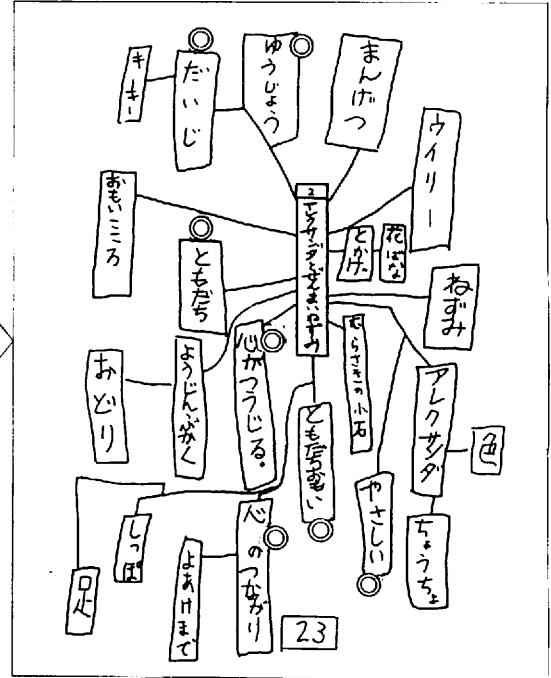


図9 学習終了時のイメージ・マップ (◎は主題)

図8の初読時のイメージは、登場人物や教材文に反応している。しかし、図9の終了時のイメージは、主人公の心情がくみ取れる。例えば「やさしい」の言葉から「アレクサンダ」の言葉を連想し、「友だちおもい」の言葉から、「心のつながり」「よあけまで」と連想がつながり、主題に関わる言葉をイメージしている。記述数も6ワード

から23ワードと4倍近く増え、想像的な読みができたと考えられる。

このように、音読し、書く活動や相互交流を通して、読みを広げ深めた結果、アレクサンダの内面を想像豊かに読めたことがわかる。また、教材文の言葉にも反応して読んでいることがわかり、H男の読みの変容がみられる。

(2) 読む過程の想像

子どもたちが、童話や物語を読む時の「想像力と読み」の傾向を探る。授業前と授業後と比較することにより個人及び学級全体の変容を問1～問3から検証する。

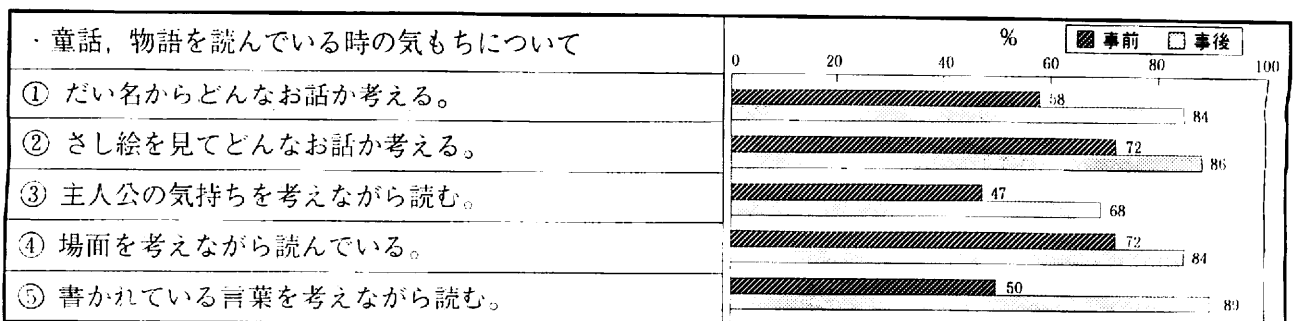


図10 問1「どうわ」や「ものがたり」を読んでいる時、次のどれを思いうかべますか。(複数選択)

図10の事前調査を分析してみると、低学年の子供の絵本に対する興味がどこにあるかがよく分かる結果が出ている。抽象的な言葉や文よりも、目に見える挿し絵や場面に多く反応している。

仮説2の検証をこなした学習終了時には、⑤の「書かれている言葉」に一番多く反応している。それは、叙述に即した読みを想像豊かにイメージした結果だと考える。

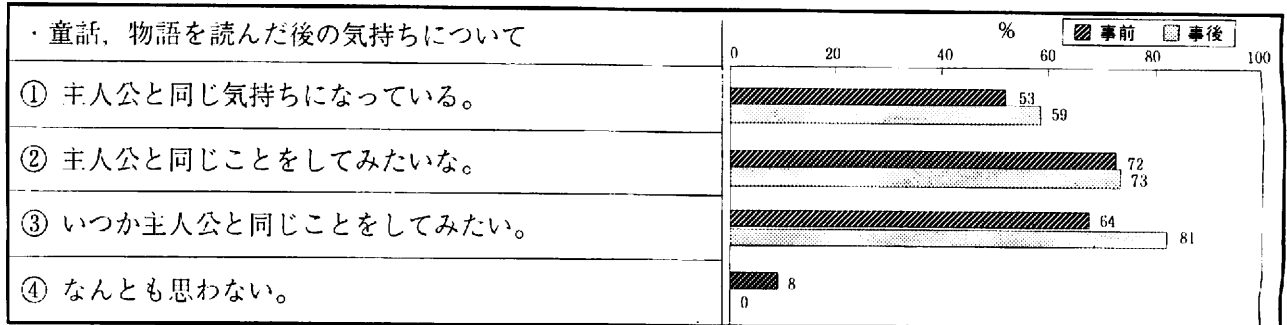


図11 問2 「どうわ」や「ものがたり」を読んだ後の気持ちは、次のどれですか。(複数選択)

図11の童話や物語を読んだ後の気持ちの想像について、事前・事後の比較をみる。④の「なんとも思わない」が、8%いたのが0になった。11時

間の学習で「主人公と同じ気持ちになる。」「同じことをしてみたいな」と思い、想像豊かな読みに対してよい結果をもたらしたと捉える。

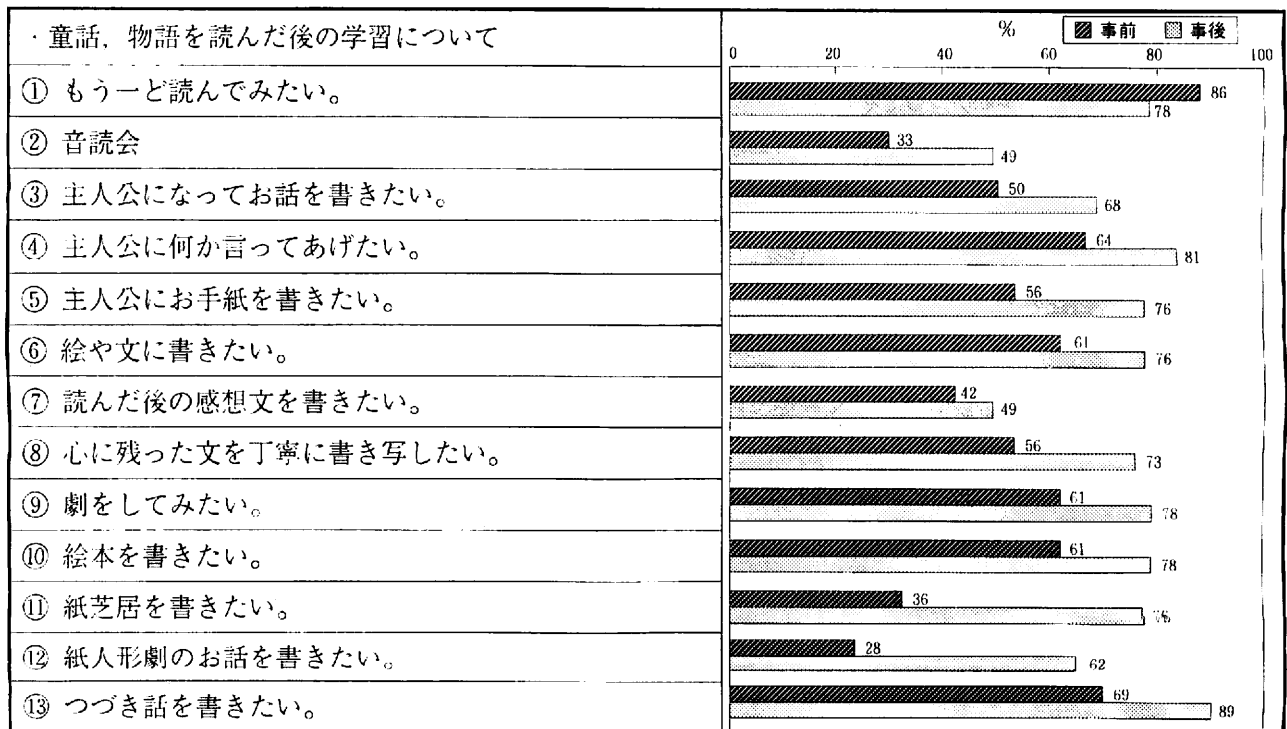


図12 問3 「どうわ」や「ものがたり」を読んだ後、次のどの学習がしたいですか。(複数選択)

図12のグラフをみてみると、②から⑬までは、事前より事後の方が高くなっているが、①は、逆にになっている。それは、子供達の興味・関心が他の学習に移ったと考えられる。特に、つづき話は、予定の枚

数より長い話や挿し絵入りの話を書き、関心を示した。事後の調べでも高い結果がでている。

(3) 言葉

① 「漢字にルビをうつ」調査(表3)

○印は新出漢字

(%)

	言葉	事前	事後		言葉	事前	事後
1	大きな	97	97	29	近く	64	100
2	音	94	100	30	生きもの	94	100
③	茶わん	75	95	31	その日の	81	100
4	四方八方	17	76	③②	午後	31	100
5	ちっちゃな足	100	100	33	日の	100	100
⑥	走り	64	97	34	前	92	97
7	出た	44	86	35	花々と	14	95
8	人間	92	97	36	ちょうの色	100	100
9	聞いた	81	95	37	ふるえ声	86	100
10	同じ	94	100	38	月が	81	100
11	大すきな	94	97	39	まん丸	75	95
12	車	94	100	40	来る	53	100
13	お気にいり	94	100	41	日	75	92
14	夜	94	97	④②	黄色	64	92
15	人形	83	95	43	青い	100	97
16	ぬいぐるみの間	67	97	44	明くる	36	95
17	大事にされない	36	100	45	日	64	100
18	友だち	92	100	④⑥	古い	50	100
19	見つかる	100	100	47	思った	94	97
20	台どころ	83	97	48	立ち	81	100
21	言った	100	100	④⑨	止まる	72	100
22	空とぶ	97	100	50	本当だ	78	81
23	お話	97	100	51	がさがさ鳴って	42	100
24	何時間も	81	100	52	目も	92	100
25	楽しい	92	100	⑤③	くらむような光	69	100
26	かくれ家	36	78	54	用心ぶかく	25	97
27	小石	69	100	55	近づいた	58	95
28	小道	42	100	56	夜明け	33	92
学級全体平均						73	96

表3の学級全体の平均は、事前では73%の出来であった。56漢字の内、新出漢字が8つである。事後になると、平均が96%となりほとんどの漢字にルビをうつことができた。読みの成果があった。

全員がルビをうつことができた漢字(5, 19, 21, 33, 36, 43)は、事前では6つの漢字であったが、事後では、31の漢字となり、5倍以上の伸びである。漢字が読めるようになると、教材に対して抵抗なく取り組み、言葉に対する関心も高まったと捉える。

② 「短文作り」の調査(表4)

(%)

	言葉	事前	事後
1	ひめい	67	97
2	しのびこむ	78	95
3	お気に入り	83	97
4	ちやほや	3	86
5	大事に	83	97
6	友だち	94	100
7	すきをみては	11	76
8	うらやむ	8	95
9	ためいき	31	84
10	ささやく	14	84
11	つかれはてる	58	92
12	なかんばかり	3	73
13	かわいそう	78	100
14	おもい心	11	84
15	用心ぶかい	17	73
16	さけぶ	64	89
17	だきしめる	64	97
18	夜明けまで	67	97
学級全体平均		44	89

表4の学級全体の平均は、事前では44%で低い。それは、文章を読んでも意味の理解に抵抗があり、学習に対しても、あまり関心が持てない状態と捉える。

それが、学習終了時には、89%と上昇し2倍以上の伸びである。音読をする時、言葉の意味理解ができると、読んでいても楽しいし、生き生きと学習に参加できるようになった。

仮説2の成果

言葉や文・文章に着目した学習活動を取り入れると、子供は叙述に即した読みを想像豊かにイメージし、意欲的に取り組む学習ができ、子供の読みの変容を捉えるのに有効であることが確認できた。

### 3 「仮説3」の結果と考察

#### (1) 話す

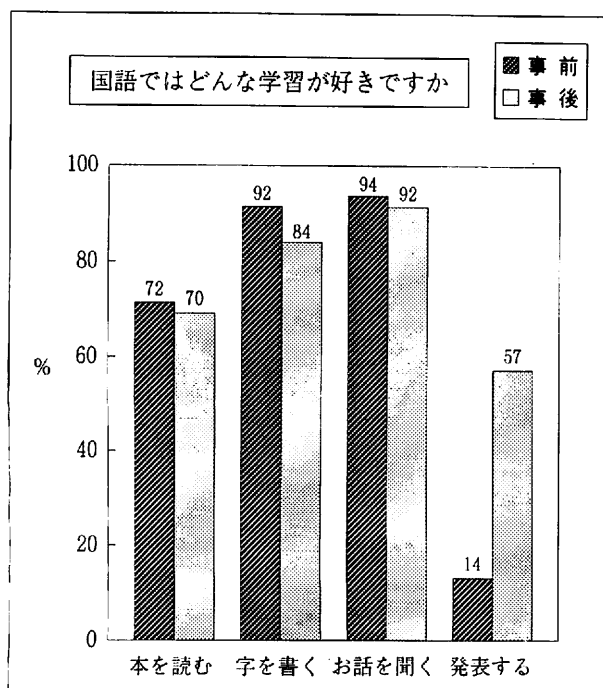


図13 「国語学習の関心」の事前・事後の調査

図13のグラフで、特に、注目するところは、「発表する」の項目である。事前の14%に対して、事後が57%になり4倍以上の伸びである。それは、学習指導計画の中に意図的・計画的に話す活動を取り入れた結果だと捉える。

また、音読で声を出し、書く活動で発表の原稿ができていたので、自信を持って、進んで「発表する」につながったと考える。

#### (2) 聞く

学習活動の中で、発表することができるようになると、関連して聞く態度もよくなってきた。「話す」と「聞く」活動は、切り離して捉えることなく、一体である事が理解できた。

#### 仮説3の成果

自分の考えを友達の発表と比較しながら聞くことは、読みを広げ、深めることができ、また、発表することで有能感を味わい、それが学級の人間関係までも友好的な変容を促すことができた。

### VIII 今後の課題

- 1 毎時間の全文通読の時間の確保と読ませ方の工夫。
- 2 「題名から思い出す言葉」「言葉からのイメージ」や「叙述に即した読みの想像力」等の質的変容の育成についてのあり方。
- 3 個に応じた読みの指導と援助のあり方。
- 4 深まりのある話し合い活動の組織化と効果的な実践方法。

#### おわりに

この6ヶ月間、研究テーマやワープロ操作等の研修とたいへん有意義な時間を過ごさせていただき、本当に有り難うございました。研究所での収穫を今後の教育実践に生かしていこうと思います。

研究を進めるにあたり、教科指導員の山城ちえ子先生、研究員の先生方、また、快く送り出されていた仲田校長先生、研究及び検証授業に、ご協力下さいました諸先生方に感謝致します。

最後に、懇切丁寧にご指導下さり、いつも温かく見守り励まして下さった研究所の田中所長、髙原先生、當間先生に心より感謝申し上げます。

#### 主な引用文献・参考文献

- ・有定 稔雄 「イメージ化の読み」 明治図書
- ・本堂寛監修 1「国語科の基本的能力」
  - ◇ 25「叙述情景・心情の指導」
  - ◇ 27「総合物語文の指導」
- 国語科の基本的能力の指導体系 明治図書
- ・青木 照明 「語い・語句の効果的指導法」
- 小学校国語科授業技術全書2 明治図書
- ・倉沢栄吉・藤原宏編「読解・読書指導事典」
  - 第一法規
- ・興水 実 「国語科基本用語辞典」 明治図書
- ・「小学校指導書 国語編」 文部省